









も甲夜の程とつひ侍る小思つば時をうりせり。新人あけうめく程  
と積る物語ありて人と立取りぬ於花の芝浦の館ふかり侍り  
奴もあらざれば。ぶづら枕迎の燈火を遠ざけ屍風ひたすなり  
あやえんと夜半の衣をくも今日へ思ふまじ言葉とあり  
り。枕上の裁と小つひの君妾を娶ふこれ一時のさむけれ  
く。元来馴睦とありて。沢子人退けよ薄情なれば妾も色  
小袖を身小まもむ粧ひをそゆるらん。斯枕をあらへんとも秋の  
野末の賤ふるがめも落くまりらん。又異人を迎へるらん  
と。伊去清うち笑くまのさむいそ。口とふ於沢を退く薄情  
あれ。心も我と私情を通じ。伏保への薄情あり。於花の  
耻をいざ。斯のさむい理小似く。理小あり。妻のつと。四五小元

既小伏保へ圓杖つく年なれば。あど似気る女夫あり。君と紅  
糸をひらるるれ。必むむ小むかけのふると其身もさ小あり  
り。ぐ。爰ふ一奇とまべれ。四更の頃暮光落来く。燈火の  
とあり。おととと三度夏の夜もあう。さ。小怪夏小あり  
短葉を枕り。小近づくれば。漸そのまも止り。伊去清。平斗  
づ。煙州盤の抽斗あり。光明寺あり。里人のあへ。一  
。心。此簪をむえ。あ。是情人をひき。れ。や。の。程  
。が。つ。ふ。又。昔。を。語。る。賜。と。なり。と。雨。後。あ。ま。り。あ。る  
仰塵。う。り。と。物。音。く。枕。方。へ。落。る。の。あり。短。葉。の。あり  
あ。う。小。ん。と。大。さ。二。三。尺。も。あ。る。地。へ。於。花。の。女。の。ひ。ら。り。た  
あ。と。つ。つ。く。落。退。く。を。伊。去。清。あ。ま。づ。り。右。小。手。短。を。さ。り。た







小地を掘んぐ採らぬふらちまき。周房ふいんとるは小彼地へも  
 くも伊去清より先ふりり。坐敷中小頭をりげ香をたいて  
 居たり。伊去清心中ふおひへ昔より女の一念地ふりしこゝ  
 少なるべ。於禪が一念及鬼と成る。口を怒るも知るなまら  
 公弱くもくふあ〜りるんと。手燭の柄みく地の胸中とつた  
 とをまぶ。地へ苦しげ小尾と頭をひとりふあつめ。手燭をまふを  
 そのゆく庭ふお捨国房ふりり。此所へ山ふい流ふりり地なれ  
 ぱ。うも夏もわくありるん。おそくともれと於花を言好お臥ね  
 程るく曉告る鐘声小夢を中つと。伊去清へ枕をり。枕りこ小  
 ありー煙草盤をひらるせらる。先の地側ふらり居り。お驚る  
 煙管をとりくちつくと。る母近う来りく。先小物語を。於花

簀箸を唾へつり出さるひゆくと。そんとまる小忽ち一團の陰火と成  
 屍風を越しく飛出れば。伊去清も水洒とるせー。物音るさへ  
 於花の目や覚〜くおそわやせんと。食を被く又夢をむむび  
 ころ。夫より〜へ伊去清が猛心小。死雲やかさしり。何の怪莫も  
 幾年を経く二人の愛子をりけ。兄を悦五郎とるびく五支  
 たり。この頃飲びありー妹を於村と名号。又彼伊藤快保へ年去り  
 と。わらり近き莊家より養子をあり。此者を伊藤金吾と改  
 今芝浦小住り。口と金吾と水魚のふりこあり。又  
 のむくありふらと我誰ふ来れ。彼兩人の説話ふ〜とま  
 空言ふあらば。おぼらげ小傳少へ被飲次が舎小此頃ま〜  
 ことあり。是り〜の沢子が崇るる〜と。おとこあつるとか〜



されどその一夏はつづくつづく我ふが小語りば。さされば印を  
 へさりー小蛇も由縁るはあはれなる。侍女秋次へ被秋次は女  
 物ざりのうち少時席を遠ざけり。えとふを拍く秋次を  
 へし。酌をそろせ又杯をまきりれば人くも音をあらう。思  
 ひとあやした説話といひのまらひる。時小不思考や先の小蛇  
 縁されりきりきりとのりあがり。秋次の裳のあらひへりつる。秋  
 次呵と呼んぐそのまゝ倒れ息をとりれば求次郎をみり席をあ  
 らぐ。まゝいふあゝけりと抱きかかひ。中ありて息出さるく。向  
 小朱を酒に。髪をむしりて服さうづり。恰も給ふうつら鬼女のおく。倒  
 の銚子をそろく大地に投つけ。あはれ憤やけとそのあらふ。伊  
 美清が女計をつめたらば。只責ふおぼくとのことひ。さうる親類

もあうされは川あつり。光せり。ぐ。おひひさや快保が側女と私  
 情を。被を髪と本意とする。悪さも憎し。一念忽地小蛇と  
 なる。伊美清が身小進づけ。被が勇気小さきこけられ。つよご  
 念へ逐ざれど。つづく人の怨へあらぬのやまぬめのや。己り夫婦  
 三途の巷小誘引んと毒を握り牙をく。ゆとつく息の夕陽小  
 ひらつく。火焰のむく。求次郎を恨み。げふおんや。中よ求次郎  
 汝が不良口のち小多くの人の笑語をうらう。出まらひの西の十重  
 九重。うさねる夏のうらや。と。板縁をうらう。西へ走り東  
 へうけのうら。狂よさ。刀山。樹の罪人のむく。まこと。度。眼  
 らら小此縁。前小その重さ。うら。が。石盤あり。水満と。へ  
 これバ。己が。顔の水面。うら。と。熱と見。ありと。汝ら。なる。顔。も









鳥の鳴き声



舟のり

舟のり



る人よあひもかれど足下より歩くる中。伊去浦が籠小地  
鏡の怪変と語り出又如くこの怪変をゆゑに。彼次乱言と  
しつら伊去浦花子のさなり氷人あつる。歡次もさうく恨  
りやうなれば此のち伊去の家も。つらう怪変あつてもさう知  
ぢやうぶ。さうく尊容をも詳小椽致を告んらあ。まのれらりといひ  
ねい。金吾も大いおとと。まづ歌次が光景をゆゑんと。いさく求  
次郎ゆゑとも。相戸の風入より眠さるれば。歌次のなほねい止  
ひつら。哭悲を疊とひねるぐ。業を束く人形をつら。さ  
置りといひ。汝花をゆゑ此服をゆゑ伊去浦が春を發し。つら  
此口をゆゑ。次子を退りゆと。表討をゆゑあつる人と。つら人形  
の向とあつら。さうと。響みくつら。ねい又右のゆゑと。つら夜

ひねりけ左のゆゑと。枕ふらうら。つらんと。潜然と涙をかき。  
つらふとを於花汝つら。小此胸小おぼえあつら。あつら。三度響小  
つらつら通せ。不思美や皮さけ肉中。あつら。鮮血淋くと  
まつら。あつら。求次郎金吾の二目も。えい。後堂小逃るら。  
とねい。面土のゆゑ。漸むら。あつら。あつら。更れば。臥戸小つら。休  
たり。かくて作助へ。昧且あつら。起出。歌次が押籠ら。と。一室あつら  
小音も。あつら。をいづら。中を。杉戸をひら。あつら。小業。形  
あつら。つら。歌次へ。えい。出口をか。あつら。あつら。あつら。  
あつら。道理。あつら。と。克く。あつら。あつら。あつら。あつら。あつら。  
あつら。十筋。ひねり。あり。あつら。あつら。あつら。あつら。あつら。  
あつら。金吾。をも。あつら。起。あつら。あつら。あつら。あつら。あつら。  
あつら。あつら。あつら。あつら。あつら。あつら。あつら。あつら。あつら。

伊去浦花子のさなり

三



それとあつらんのももろく。只次次が髪飾海胆ふちりありしむづん。  
紅へちりちりるるふ。ささしく小袖の裳浪向ふひりりやとるる急。  
さひれあげればあられむなぐさのふの顔色あをりもろく。ささの  
むくちく瓢のむく腫液半のうら小溺死せしありさよるるささの  
まなまの趣を告死骸を次次が方へちりや。尚花方の家も  
崇りあらんををささ僧と清く経とらよし且一伍一付を書  
筒小まろく。作助を使ろく鎌倉へ走せれば日あは伊左衛  
が室ふりり。於花も對面し。求次郎がうらまをを物語せし  
らり。於沢が靈の次次をそり殺せしと金吾もよめあさりさ  
らまろくちりもろく語り出彼死を避るを簡要さるべしとねも  
いら小少えれば伊左衛夫婦大ふちりと。冒小火のつれ足りちり  
夏ふしとまろくをなとる。

花のちやうこ  
第四回 夢乃奇夏

蚊の登るがごとく。急ぎささのうらまの居り。神主とあひく揮  
るどせり。善を施し身を慎むると。あれらも両家つとく無  
夏ふしとまろくをなとる。

陽馬羽を中より。ささの三年の星霜をうらまのち石良夏出  
来て。遂小花方伊藤の両家絶え。其縁故といふ。求次郎往年より  
偶友がさ小誘引れ花と柳の巷小眠り。隅田の月見る。ささの  
茅が原の笠中よりふりささの女肆がらひ止とる。此頃名どる  
巴梯津島と中へ小殊小相愛の情とろく。且夕更小家小あさる  
へ求次郎が伯母近さる。ふありらる。此夏略夢及び夏ふり







鳴原  
聖昌



くわんがや  
ねづ



山崎 宗信

霜夜星卷之三

十



あつふ風流なつらう。此頃よりなづく芙蓉とつと妓のまをまわひ  
一松小輪子眞緒の馬下駄へ今松ふしく目ざらふみこみら  
ことりつあをべん形をか抱くあり。群集るかりてごもへらやこと  
かのぐまふあゆむ品あるうふ臆富士の野郎笠へ肩をうくし  
辰く助流不黄縹子のうらつつけと羽織をつでの大小と行をうふ  
とら甚七が制毛り鞘まづく。冷竹紫竹の杖つれまへりや  
前まごの餘風へつり髪ひげの男へ鬼のめんめんのつとつとく頭かしらより羽織を  
ふり。角太夫かくたふの七小町ななこまち祈音いのね三井寺みやうじ多おほさねしゆねの扇あふぎより  
してうらひ。高砂足袋細緒たかさねとびひちひのうらごらう。朽木結くつきむすの丈たけらうを  
る浪花なみの人とんえ中川喜雲なかつかわきうんが口あひをつひ。唐子からこゆひ扇あふぎありとほ  
わくとんばおごうくもひべん。その餘へ今松帯いままつおびのこづみぬ漆ぬり蛸たこ蛤かきひとひの

茶ちやせんがむ。むらさねのむさ頭巾づぶん焼印やけどのしるしありさる債編笠せむせむぞちさ空手振そんてふり  
へ玉水鈴虫たまづいむしのうら。詔宣みづかの道杉みちのぎあつひのうらの浄瑠璃じやうるりらうさひのんや  
れづ。小諸節こもろぶし口くふこりた。英中えいぢゆう年としの蜘蛛くまのわらわの天あまのゆる白しろらり  
りんの綿わた入いれなちう。雲間うんまぐも。緋ひぐりのごそまらあり南なんふあぐり。  
北きたふさ。賤せんひさふひつづく。程ほどうう求次郎もとじらう金吾きんごハ巴はや  
う橋はし小このわれば珍魚めづしな一尾ひとひ百錢ひゃくせんをいつら海山うみやまのさるさるとそとそのの人ひと雜まじ  
疑あやまちちあつあつよりよりくくつつ。ややと相方あひさつ津島つしまも出いででららがが青あお  
竿端やうたん麗れいああくく花親はなちか柳腰やなぎこしままををななつつり。求次郎もとじらうががままららつつししひひ  
りりとと金吾きんごももむむののららふふひひりり。ああのの夜よへへ雨あめををななつつりりひひとと海うみままちちをを  
ななれればば金龍山きんりゆうざんのの別わかれのの鐘かねももななまま少すくまま。ままぐぐるるままららふふ一ひと日ひ二ふた日ふたひとと  
ららりりららかかつつててああるる夜よ求次郎もとじらう津島つしまももむむつつくくややららんん。ししととはは身みととかく



馴染しも一年あかりの偶々ありし頃の伏身ふりて煩悩  
 の犬うそども退らば又此身もかくらるる契り多し。ゆめられし  
 ともいふるさう。幸ひつとふさぶさまる書もす。此身を頼と通ら  
 るのワの花と縁にとるへども。伯母なる者うそ割しと詩をば三十  
 らぬまじく暮せむ人のさうんふもあはぶと切みさう。ゆめられ  
 も唐衣つまひらるるまづ不約とららねたあるとく。此身の情今更  
 志らるゆめあはね。筑波山の蔭茂く通る人目の園もさうなる  
 且。かりくならで通ひざし。又逢まじくの余波とるひあの日頃  
 家小くらげ。此身もむらうらまれど今宵ひびと。不あ解る此夏  
 早く白地小語んとるへども。つらどの山の岩つどつらで胸をさう  
 つらど。枝葉つらつ小物語れば津島へさふつらへもせぬ。末次郎が

膝小醫よりつけ居らるる顔うらあげく。人の書とぶめつらまら  
 者と兼好とせん法師のいひし。さうしてふらむも中々。ゆめられし  
 うらむれりぞん。夏之誰ふとらん。枕の塵塵川さけの身ふり。假  
 の契。おかくちで実ある。志の。あのもく先とも泉下へのうら賜る。り。  
 寄方定ぬ。捨小舟。今日の客人のゆふ従ひ。又明日の客人もあな  
 どり。さうふりて。待夕送曉。誰人の為といふとをさうら。び。外境  
 客小出れば。おそほう。小間夫やあうんとせり。又武客へつと。お心の何ど  
 んやんとさる。針とめくと。腕お各と刺と。り。へ空言へ実。さ。と。り。の。頼  
 て。廓と。さ。る。れ。ん。あ。る。ぶ。我。宿。お。い。が。る。う。ん。と。疑。ら。ひ。そ。う。は。も。疎。か。し。く。ふ  
 へ。人。あ。う。と。ま。う。へ。あ。へ。で。涼。世。の。さ。う。ひ。あ。て。あ。る。が。ら。殿。と。恨。と。あ。い  
 あ。ね。ど。今。の。さ。う。ふ。こ。の。皆。跡。さ。れ。空。言。あ。う。ん。つ。ら。心。の。ち。と。是。れ。あ。う。



何れにせうわりのひて  
あかしくろのひも  
とろろこれあへ  
とろろ  
とろろ











うんぢしあをまがう  
もじらうがおま  
まごまけんの  
ありと  
うまる

うべまれど向人なれ小語んハ物乞んハも似たりと云へど。ゆふあそ  
く遠小言葉と殺せしくと物語れば半藏つらいつと外小子もあ  
実取獅子の玉と毒がどく。せりけ長ると悦びくけが老の来るま  
ちらび此妖孽いふくとう免く夏あぶ示しぬ人と餘毛多くよひ  
税ハ一言ぬも及び一枚の肉刀帝とそり出く。朱とめく海松と東  
くむくの文字と書く。さわくくハ此符とめらく。二月三月の間ハ福  
五尺ふぞだざる小川あくも舟と博く。又つらうあくも不淨小穢と  
あぶ罪と蒙ると泥をおく身へ及るうりも速るんといひあつて。遠  
小寺くうつる所とあぶ。此税と見えありし人のいつるハ。是ハめと肥前國長崎  
の産ふく。青木主計といつるのめく。某の神祠とあがり。或とれめり  
かつるれ罪小可せられ。門戸と青竹めく。岡られ。うり。神小仕へつと









らん入るやふもこと  
ろくをせつらいるし  
り神とうまのいとうん  
とさよんやのふういに  
まふまふまふ



鯨鯢の百川を吸ぐれば大洞あり。津島求次郎も大酒を獲て  
らる。官大夫よりいひし求君あめらる。秋漸更て花街小名高  
の雁堤小近き虫の音もど又いひしかりびや。ひとちづ此樓を  
めくくのら出歩み往むやと只管さるりければ求次郎の衣打  
りある。肥後本綿糸裾のうへ子持さるり漆も。金吾が羽  
て立出れば津島いひ明日の館へゆきせらる。今宵のつれ  
物語もいへばと止りれど露霞春風ありとさ人定むべかり  
まび出ひる。憐むべし求次郎が命朝馬ふむ雪仁のぞ。れ  
泉の旅立ちあり。さびまの國を踏むる夏ゆりあはれも又嘆  
津島も花巷をるる。さくはれぬれども詮さるる待合の松乃  
りたる床机小腰あけぬ。実みや皓くも秋の夜遅くも春の日

さふ長しとやさる契あるふとひ一夜してつら又錦被と同床ふらる人  
とささるらむれ口覆ひまらる。人も目止る義人。さても二人へぞり出  
駕づけの松ともお道一ちる官大夫つら貴客何とく斯廓ふ日  
かたねさるぐまに遊宴をひらぬふと問ればさればそ我花街ふ  
と厳しく警る者あり。されど賊のひまありと守人のひまありとや  
更ふ家ふあつざれば兎角書迎人ありまらる。びと逐ふ其更整ね  
こころ花巷のえおさめとさひ此日頃娼家小居わり強家を忘れ  
あもあつと物語る小官大夫の中ふらふ。此求次郎九十の小  
と頗富家へ書迎つるふらふ。極く金銀の類の物ありと  
らる。斯巴栞ふ日を送り疑なると忽地悪意を覆しかり言  
らる。此頃賭ふ利を失ひとらる。皮袋を覆ふらる。はて









雪夜星者之三



雪夜星者之三  
くわんごゆふね  
とらふんとりて  
いさうとらふと  
そらら

雪夜星者之三



て盤石小おつくるがどく。城々々々比良の山下風小。おぼれ々々真野の  
浦秋吹々々小似たり。求次郎そどり落さる流へえ来田の面へ  
く水とひくんどり。水道へうけらる水車の水門へ樋の板とらりあ  
るを踏落しれば車へ漸小鏗出さるくとめらるふありや求次郎が  
う袖車小やとひつれ動く竟あさる官大夫と是幸と袈裟がけ  
小切放さる腸より下へ瀧小ちり。両手へ堤の草と掴み生齡僅二十七  
と一期と々々。黄泉の客ととりあさる官大夫へ止め刺んとさる  
あさる刀ひりきもく。抜ざれば臆月小まうさる小萬巻と書さる  
辻札小刀尖あさるく切必さる。足をうけとねえれば堤の上小人声  
あり。根さるる小花巷さるる馬廻へからさる挑灯さるると  
さる落さる。又後の方虫の音俄小さるさる小むづき最ふくさるひく

うさる果さる小路づさるふ来る者あり。ささるさとと鋭鏡さるさるさる  
つる小的さるれとさるへあ母足さるや小さるさるさる逃んとさる小枝へひさ  
度さるさるあれ。ゆさるさとと窺小求次郎が袂囊小紐をつけ首小かけありし  
と切らさるる。周章とさるさるのさるれ。四方小人声さるさる。やれ人殺さるさる  
さるさるさる小警の畔とさるさるさるさる。あやさるさるさるさるさるさるさる  
さるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる



霜夜星三卷畢

未次

及

津

中

15



